

## しのびよる水の危機 ～水は誰のものか～

東京農業大学客員教授・農政ジャーナリスト 中村 靖彦

私は長いことNHKで食糧問題や農業問題の取材や、NHKの最後の段階では解説委員として自分の分野を食糧問題・農業問題にして解説をしたり取材をしたりしていました。人間そのものが理科系ではなく文科系なものですから、食糧問題にしても、社会経済的なアプローチで取り扱うスタンスで、やって参りました。

### 水も食料と同じ、分配が問題

水に関心を持ちましたのは、食糧と水は切っても切れない関係にあるからです。食糧問題については、この20～30年の間に“しのびよる不安”と言いますか、これが現実のものになるのではないかと問題意識をずっと持っていました。水もやはり同じではないかと考え続けております。需要供給の関係で、供給が少なければそこに様々な利益を求めた個人・団体・企業が参入してくるのは、当然の帰結であると思います。そのウォータービジネスは、既にかなり活発になっておりますが、そういうところを入り口にして水の問題を考えてみようと思ったわけです。取材をして一冊本を書いたので、特に水についても凄く何年も研究してきた人間ではありません。

“水の危機”はやはり供給量の少ない所に、“危機”という言葉が生まれると思うのですが、今年の印象で言えば洪水・台風など長雨の連続でした。これは水が足りないどころの話ではなく、水が多すぎて、我が日本は青息吐息の状況であったと思います。

改めて申し上げる必要もありませんが、地球上にある水の97.5%は海水で、その残りの2.5%は淡水です。しかしこの大半が北極や南極の地域に存在していて、私たちが身近に使える川や湖や沼や地下水は0.8%しかありません。これは絶対的な量であり、この水をめぐって思惑が交錯するのは当然だと思います。今年の場合、日本の例を踏まえて考えると、水は食糧と同じで分配の問題が大きいという気がしております。

京都で世界水フォーラムが開催された時に、私は取材に行っておりました。その時にピーター・ブリックさんというアメリカ・カルフォルニアのコンサルタントにインタビューをしたことがあります。彼は、「今、地球上で11億人の人間が安全な飲料水に接することが出来ないでいる。24億人の人が衛生的なサービスを受けられていない」と仰っていました。FAOのデータによると、栄養失調あるいは餓死寸前のような境遇にある人口は世界で8億人いると言われております。そうすると同じ分配の問題なのですが、水の方が厳しい人たちが多い気が致します。

### ビジネス・チャンスと水

そうした状況において、水についてのビジネスチャンスが生まれてきました。私たちが一番身近に感じる水のビジネスはボトルウォーターでございます。私がアメリカやヨーロッパで取材をして感じたのは、このボトルウォーターの世界でいちばん成熟した社会は、フランスなどを筆頭としたヨーロッパだと思っております。そして今、猛烈に伸び始めているのがアメリカです。日本は、アメリカを追いかける形でボトルウォーターの世界で企業が活動しているという気が致しました。日本は、大都会の一部を除

き、決してまずくはない、良質な水が水道からでも飲めると思っています。ただヨーロッパは何年もいろいろ取材をしていますが、昔はフランスへ行く時でも「向こうの生の水は飲まないほうがいい、気をつけなさい」と言われました。そういう中から、おそらくヨーロッパのボトルウォーターのビジネスは、非常に盛んになったと思っています。ただ日本も非常に良質な水道の水が飲めるにも関わらず、これだけボトルウォーターが盛んになったのは、健康志向・自然志向、もう一つはファッショナブルな感覚がむしろ大きいと思います。

ファッショナブルということをもう少し具体的にご説明いたしますと、アメリカには「アクアフィナ」と「ダサニイ」というボトルウォーターがあります。「アクアフィナ」はただ水道の水の塩素を取り除いただけの水、「ダサニイ」はミネラルの方を添加しているボトルウォーターでスーパーマーケットに行けば何処でも売っています。いずれも非常に売れ行きが伸びているのですが、いずれもただの水道の水であります。アメリカでは「スプリングウォーター」などといった表示をしていることが多いのですが、これらの商品は「ピュールファイルドウォーター(清浄な水)」という表示を付けて販売をしております。向こうのコンサルタントなどは「どうしてあんなのが売れるのだろうね」「消費者はただペットボトルに入っていれば有難いと思って買うんじゃないか」と笑っておりました。これを作っていたメーカーが、去年の12月にフランスにマーケティングをして、進出を図ったのですが、売れずに壁にぶつかっているようです。これはまさにファッショナブルということを念頭に置いておかないといけないと思います。

## 地下水は大丈夫か？

ボトルウォーターを考えるとときにやはり心配になるのは地下水です。地下水を汲み上げてボトルウォーターにしているわけですが、日本の場合には雨が多くて比較的補充が順調に行われるので、地下水の枯渇まではなかなか思い及びません。実際に一番メーカーが殺到している、例えば有名なサントリーウイスキーのモルト工場がある山梨県の白州町でも、水を汲み上げて、ボトルに詰めて全国的に売っています。山梨県は日本全体の半分くらいのシェアを持っていると記憶しておりますが、何箇所かスポットを決めて定期的に水位を測って枯渇しないようにするなど、非常に地下水の管理をきちんとしています。日本の場合、地下水の補充という点では、今くらいのメーカーが現在くらいの量を汲み上げるのであれば、心配はないのではないかという印象でした。

ただ日本とヨーロッパの非常に顕著な違いは、ヨーロッパでは「ナチュラルミネラルウォーター」という表示をつける水については、汲み上げた場所の水をボトルに詰めます。除菌や添加はしないことがナチュラルミネラルウォーターの表示になってます。一方、日本は「何も除菌もしないで出すことに抵抗があるのではないか」という消費者心理を考慮して、除菌・滅菌をしたものをボトル詰めて販売し、それに「ミネラルウォーター」の表示を付けても構わないとなっています。

ヨーロッパの場合には、水だけではなく「環境を飲む」という考え方があるため、ゴミを捨てたり、動物がいたずらをしたりしないような規制表示を作り、地域そのものを保全しています。ヨーロッパには表示や規格を国際的に管理しているコーデクス委員会というのがありますけれども、コーデクス委員会では、ヨーロッパの基準を「ナチュラルミネラルウォーター」と呼ぶべきだと決めております。日本のお役所も少し悩んでいた時期はありますが、現在は独自の表示をしている訳です。

## アメリカで頻発する水をめぐる紛争

日本は地下水について、現状、それ程危機を感じるほどではないと思いますが、アメリカは水をめぐる紛争が頻発しておりまして、ほとんど地下水を巡る争いでありまして。私が取材したのはミシガン州の小さい町でモートンやメコスタというタウンよりも少し小さい町の水争いを取材しました。この地域は沼や湖が非常に多い湿地帯で、水鳥なども多く、比較的閑静で環境も良いので別荘地なども売り出されて、人気を博する地域でした。

その中には“サンクチュアリ”と言われる、中で狩猟が出来るような非常に大きな土地がありました。その地主さんが大手のボトルウォーターメーカーと地下水を供給する契約を結んでしまい、そのパイプラインを工場に引くことになったのです。そのパイプを道路の上に引くのではなく、地下を潜らせて作ったので住民が気がつかなかった。そこは過疎地域だったため、ボトルウォーターの企業が住民説明会を開いて、初めてそういう事が進行していると分かったわけです。行政もボトルウォーターメーカーと事前に相談をしていますからメーカー側でありまして、既にその話は決着しているような状況でした。

住民達が抱いた最初の疑問は、広い湿地帯にある地主さんの土地の地下水であっても、水は地下で繋がっているのだから、その水を限定して吸い上げることは地域全体に関係することではないかということです。計画の中止を求める様々な交渉や要求をしたわけですが、もちろんそれは受け入れられる筈もなく、結局訴訟になりました。

訴訟もいろいろあって、最初は土地の地目変更を認めない訴訟、もう一つは水が吸い上げられることによる地域環境への影響を考慮して、工場設立そのものをやめさせることを訴える訴訟でした。しかし二つとも市民のグループは敗れてしまいました。

三番目の訴訟が「水は誰のものか」というものでした。この問いかけの訴訟はかなり有効な言い分になったようで、その時初めて市民の会側は勝ちました。しかし企業側がその判決に対して異議申し立てをし、それを行使しない仮処分申請をして、結局認められます。その工場には 60 人くらいの地域住民が雇用されているので、全部ストップしてしまうと雇用問題まで響くために、仮処分で判決後も争いは続いている状況でした。

日本はそれほど今は緊迫した関係で住民とそのメーカー側が対立している例はありません。しかし将来、メーカー側の活動はどんどん大きくなった時に、今申し上げたようなことは一つの教訓になるかもしれないという気が致しまして本の中に書きました。

私が取材をした段階では、全米で7つくらいの地域で訴訟が行われておりました。それは「地下水は、地下の何処まで行ってもその人間のものなのか」「現実にはそうなのだが、本当にその考え方でいいのか」という問いかけをしている訴訟が、非常に多くなっています。アメリカは、日本よりは雨も少ないし水も恵まれていないため、ビジネスの世界に参入するケースが非常に多いと思われます。

もう一つ面白い例は“水のコンサルタント”という商売がアメリカにあります。これは大メーカーの意向を受けて、特に途上国に対してボトルウォーターのマーケティングをする仕事です。NHK スペシャルという番組が取材して紹介した例は、インド市場への進出を目論む大手メーカーの話でした。1998～99 年当時、インド市場には小さい水のメーカーが約 3000 あったのですが、水質の基準も何もないために、ボトルに入って売られている水の安全性は低く、それをただ適当に販売している状態

でした。“水のコンサルタント”であるハイデルさんは、まず行政に対して「品質基準も何もない状態でボトルウォーターを売っているというのは良くない、人間の健康にも良くないと」説得して、インド政府は2000年3月に水質の安全基準を作ります。そうすると今まであった約3000のメーカーは基準に該当しないため潰れてしまいます。そこで本国のアメリカから本当のボトルウォーターを売り込みに行き、大変な利益を得ているわけです。

そして彼の次なる仕事は、潰れてしまったボトルウォーター企業に対して、もう一度新しい基準で水の商売を始めるアプローチをして、会社の再建のお手伝いをするのです。水のビジネスは、だんだん活発になって来ていると申し上げていいと思います。

## 食糧問題と水

私は食糧問題・農業問題をずっとやって来たために、どうしても「食糧問題を水」という事を考えるを得なくなりました。食糧問題との関連で言えば、鍵はアメリカと中国にあると思っております。食糧問題での日本の対外依存度の中でも、2001年のデータでは、第一位がアメリカで37%、第二位が中国で12%を依存しています。これらが日本の2大依存国で、三番目にオーストラリア、4番目はカナダと続きますが、それは大した数字ではありません。

アメリカと中国に依存している食糧と水の関係が私の一つの問題意識でありました。穀倉地帯でここ最近言われておりますのが、“地下水の枯渇”ならびに“地下水の低下”です。有名なのは、米国中西部を縦に流れる、オガララ水系というもの凄く巨大な水系です。そこでは“センタープロット方式”といって、井戸から地下水を汲み上げて、スプリンクラーで撒いています。アメリカに行ったときに、天気がよければ飛行機の上から緑のお盆のような形が延々と連なって見る事が出来るはずですが、そのセンタープロット方式によって灌漑をして、世界に輸出する穀物を増産して来たわけでありまして、日本もその恩恵を受けていたというわけです。

この“地下水の枯渇”、“地下水の低下”が言われてからかなり経ちます。私は23~24年前、NHKの現役の時に当時の大型番組で「日本の条件」という番組がありまして、「日本の条件 食糧」という三部作を作った時に、やはりオガララ水系の地下水の低下を取り上げました。これは8つくらいの州にまたがっている大変な水系なのですが、一番地下水の低下が心配されているのはテキサスであって、今回もテキサスに行って実態を見て参りました。現地では、新しく井戸を掘る時には従来とは違う届出をしなければならないとか、深さを以前よりは深く掘らないといけないといった規則が作られています。地下水の低下は一〜二年で大きな変化が見られるものではありませんが、管理上は極めて精密な計測をしております。計測マップでは非常に精密なスポットごと・都市ごとにの変化を観察しています。もちろんこの何年かでこの穀倉地帯の地下水がなくなって食糧の供給力が乏しくなるという程の現状ではないですが、中期的に見てこの要素というのは非常に日本としては懸念して念頭に置いておく必要がある事態ではないかと思っています。

もう一つ中国ですが、現在、日本の食糧輸入金額の12%を占めています。パーセンテージにしてはあまり多くないかもしれませんが、中国の場合は価格が安いので、金額で比べると12%はかなり大きな依存度だと思えます。特に現在日本が依存している野菜や加工食品についての中国の存在は極めて大きく、特に野菜をよく使う漬物産業界は極端に言うところ「中国なしでは成り立たない」くら

いの状況であります。沢庵でさえ中国から製品となって入ってくる状況です。もちろん国内で原料調達してそれなりの老舗の場合はブランドを付けて販売している所もありますが、日本の漬物メーカーの原料調達先の大半は中国です。

中国は“南水北調”が展開・進行中です。これは南の水を北へ送って調整するという意味です。“南の水”は比較的豊かな水量を誇る長江のことで、北の方にある黄河は天津や北京など大都会に送る生活用水にも不足するくらい水が不足しているので、南の水をパイプラインで送ろうというわけです。長江沿いに3つのルートを作る計画を立てていますが、現在は、上海に近い所から北へ送るパイプラインの工事がスタートしたばかりです。これはまだ本格的ではないのですが、私も現場を見ないとなかなか原稿が書きにくいタイプなものですから、上海の近くの所だけ工事現場を見せてもらい、その話を聞いてきました。

そういう事を考えていった時に、私は時々話題になっている「バーチャルウォーター」を思い出します。食糧問題との関連として、カロリーベースの食糧自給率というのがございます。それは量ベースの自給率とは違って、畜産物などで顕著に違いが出てくるのですが、畜産物を作る餌の所までの自給度を計算します。カロリーベースの自給率が日本は40%、先進国中最低という数字です。一番典型的な鶏卵が量ベースで言うと自給率が96%ですが、これをカロリーベースにすると僅か9%になってしまいます。日本にある養鶏所から卵をスーパーに届けられるのですが、鶏を飼育しているその餌はほとんど95%以上海外依存であり、アメリカのトウモロコシなのです。それを全部さかのぼって計算すると、9%になってしまいます。同じように鶏肉は量ベースで言うと65%の自給率ですが、カロリーベースでは6%になってしまいます。バーチャルウォーターは表には見えないけれども、実際に食糧を作るのに使われている水ということになる、これはカロリーベースの自給率と非常に似ていると思います。それだけ日本は飽食と言われていますが、その飽食が言ってみれば砂上の楼閣のような状態ではないかとしみじみと感じているわけであります。

## 水は誰のもの？

「水は誰のものか」という問いかけは大変難しいのですが、日本は雨量も多く水に恵まれているので、日本人の水に対する関心が薄いのが実状です。特に最近では田んぼもだんだん生産調整で少なくなって参りました。田んぼに水を貯めて環境の保全に役立つこともなくなって来ました。

長野県の山形村でお米の取材をした時に、昔お米が採れない時に近くの梓川から水を引いてくる工事を、住民達が労力も予算も出し合ったのですが、今はこのように自分で水を引いてきて農産物を作るということはほとんどないわけです。それはやるとすれば公共事業で、お上に頼むことです。ということは、だんだん水と私たちの暮らしとが離れてしまっているのではないのでしょうか。

「水は誰のものか」を考える時に、こうした意識は必要だと思います。先ほど申し上げました地下水の権利も、当然今の制度上ではどこかが違法行為をしているわけではないと思いますが、将来的にこの点については何らかの制度の整備が必要になると思います。特に先進国であるアメリカや日本などに必要性が起きてくるのではないかという印象を持っています。